



タブレットはパソコンに取ってかわるか？

著者	榎原 博之
雑誌名	関西大学インフォメーションテクノロジーセンター 年報 : ITセンター年報
巻	4
ページ	1-2
発行年	2014-07-01
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018822

タブレットはパソコンに取ってかわるか？

IT センター副所長

榎 原 博 之

近年のスマートフォンの普及には目を見張るものがある。特に、大学生はほとんどがスマートフォンを利用している。昨年度の IT センターの調査によると実に90%以上の関大生がスマートフォンを所持している。同一の調査で、パソコンの普及率も90%を超えており、学生に浸透しているように見えるが、利用時間まで考慮すると四六時中肌身離さず利用しているスマートフォンの方が遙かに利用時間が長いと思われる。一方、同一の調査結果では、タブレットの所有率は5%にとどまっている。

2013年のスマートフォンの国内出荷台数は2,928万台で、パソコンの国内出荷台数は1,519万台である（MM 総研のホームページより）。スマートフォンに関しては、前年比3.7%減でやや頭打ちになっている。パソコンに関しては、前年並みであるが、2014年4月に実施される Windows XP のサポート終了に伴うパソコン更新による法人需要が大きいと考えられ、個人需要は減少傾向にあり、2014年は大幅に減少するものと予想されている。一方、タブレットの国内出荷台数は743万台であるが、前年比67.2%増である（IDC Japan のホームページより）。2014年も大幅な増加が見込まれている。

パソコンとスマートフォンを比べると大きさも違い、用途は全く別なものと思われる。しかし、タブレットはディスプレイも大きく、パソコン代りに利用するユーザが増えていると考えられる。初代 iPad（2010年発売）が登場した頃は、見づらいホームページも多く、閲覧できないファイルも多数存在した。しかし、最近ではスマートフォンやタブレットを考慮したホームページが普通になり、パソコンが無いと閲覧できないホームページやファイルはほとんど見当たらない。閲覧だけに限れば、タブレットの方が遙かに使い易い。

タブレットの浸透率は、2013年末の時点で、日本では18%である（カンタージャパンのホームページより）。ちなみに、アメリカでは37%である。パソコンと比べるとかなり低いが、将来的にはパソコンを超えるのではないかと考えている。タブレットの操作は、スマートフォンとほとんど同じタッチ操作である。スマートフォンに慣れ親しんでいる10代、20代の若者にとって、パソコンは既に敷居の高いものになってきている。私は、大学1，2年生対象に情報リテラシーの演習を行っているが、この1，2年パソコンに不慣れな学生が増えてきているように感じる。キーボード操作やマウス操作に苦労している学生も見受けられるし、

今まで教える必要の無かったウィンドウ操作やフォルダの概念について、質問してくる学生もいる。

今後、パソコンは無くなるのだろうか？ タブレットはホームページや文書の閲覧に便利であるが、特に長文の入力や表計算ソフトなどの細かい操作はまだまだ不得手である。今後音声入力や操作性が格段に向上しない限りは、パソコンが無くなるとは考えにくい。特に、ビジネスの場面では、外回りの営業などオフィス以外で仕事をする人を除いて、パソコンは無くならないであろう。しかし、個人での利用にパソコンは不要かも知れない。ほとんどのことがタブレットで事足りる。強いて上げるならば年賀状ソフトである。しかしこれも、今の若者が年賀状を書かないことを考えると若者には関係無いことかも知れない。

今後、個人利用はスマートフォンとタブレット、ビジネス利用はパソコンという棲み分けができるのではないかと考えている。関西大学にとって、より一層のパソコン教育の充実が必要であると同時に、ほとんどの学生はインフォメーションなど情報をスマートフォンやタブレットから利用している現状を理解し、スマートフォンやタブレットからの閲覧性の向上が必要である。その意味では、公式ポータルアプリ「モバイル関大」には大いに期待している。